



重修真書太閤記

初編

十

13  
459  
10





特 18  
459  
10



重修真書太閤記初編卷之二十八

藤吉郎加勢の兵を率ゝ歸國の事

并今川義元鳴海表出陣乃事



江州の太守佐々木右衛門督義弼幼弱かぐ名家の嫡子  
より自然と大度の器となりたる故もや又い木下  
蜂須賀乃英雄興ぶる天運の循り來りし時なると  
や木下藤吉郎多くの旗さしその甲冑兵具弓鉄炮を  
觀音寺の城より借受あまこ此大夫人荷擔させ越智川  
乃宿より來るるに兼く約束せし時刻たがえぬ蜂  
須賀正勝江州濃州の處より徘徊しける黨類一千五百

柳菴栗原氏校訂

重修  
卓書  
太閤記  
初編  
卷之二十八

知新堂



餘人と催促し今や遅しと待居り藤吉郎大悦  
び荷擔し来る兵具をゆく小配分しさてその者共  
を以て川端に備え立隊伍を整えあをを見らる旗印ハ  
六角家の街頭四目結のよせうけりたれ江州勢と思  
ふはるべきその上小此ものども多く江州をのるれが實の  
六角勢ありともいふ是にまをべきと藤吉郎よくそ  
を以て蜂須賀を招きその隊の進退を定めはる尾  
州をさうく急ぎけり抑六角家より加勢ありとも多くハ  
輕卒のそみで名をくしと耻を知りどの侍い多うとこれハ  
いづれも野武士よりて命あるものあををものども多くハ  
一人を以て三人五人ふ比しりべし然も一千五百人ふく

五六千の兵と借らる小むし中ふもこに勝るを  
撰り大將物頭と定むそれ抑誰ぞ先一番小蜂須賀  
正勝それよははりて稲田大炊助青山新七同小助河口  
久助日比野六太夫長江半之丞梶田隼人松原内匠助等  
ありあはれ何れも名を得し勇士なり然もく飯よ  
江州侍の名を付くこれを伴ひ歸りける伊勢路を敵  
國より案内かく狼藉のなどもくろく道と北  
畠は假し通行とべしとおひびくば藤吉郎私の使者  
と員辨の郡梅戸貝野の地頭遣り是ハ江州佐々木  
六角より兵士一千餘人尾州へ差向ひ御領知り於  
いづれも濫妨仕らば異儀かく御通しぬる様

大関己の編長二一八



中やうによりのいづとも子細ありとて道をかりけきは  
おりのやうふ通アそくくり

流布本佐と木義秀の書状と請く北畠の居城大河  
内よ遣り道とあり由とあるはとも貝野の  
領主貝野右衛門佐安重梅戸の領主梅戸右近大夫  
高實の許へ道とありとたうよその家と傳えられ  
今これに従ふ再按ふ六角承禎木下乃説小従と兵  
士とあり何とて北畠へ兵士の道とあるの書状と  
與ふとて越智川より北畠の大河内まぐ行程往  
復五六日を費とて是理は於て迂遠なるふ近  
木下と蜂須賀と共に伊勢路を経て尾州へ入る

尾州の地下人ども近江勢乃旗さうものを見こきい  
ふけきとも佐木家の四目結といふこころより  
知しと形とば實は六角家の軍勢とありひ疑ふもの  
さうふか既此勢清洲ぢうなるをばはたぐめ  
江州よりの援兵覺束なりといひその最初織田殿  
の武勇猛くや海を上に六角家の加勢あるうへ今の  
心安したぐ加勢の軍兵小劣りて人命生ても何うせん  
と云ふほどに今ハ勿くおりの切く勇める心地たけくす  
しく見こりけ藤吉郎は清洲に到着し江州勢よ  
それく旅宿を割與へ我身を織田殿の見參入承禎  
父子の有様を言上し次は兵器を借りて



より蜂須賀正勝の智ありく勇あるを成りつづけ  
行く一方の御護りと形るべきものと勧め奉り但今  
あむい江州勢れよ小思召せゆと次第具又述  
たりい織田殿甘心まへ藤吉郎が中行ふ  
諸老臣つを沙汰せしむる

流布本義秀の一字を以て改名し諸士へ朝比奈三郎  
義秀と轉倒して己が名その勇と慕ふる披  
露せし由と注とをいども此一條よく澤田源内  
の偽説あるを明白なれば盡くこれを削る  
織田殿を諸方の砦は勢をもち又江州の加勢を得し  
上今川寄来りなむ中途まぐ打て出國堺を勝負

を決せんとその用意取く形り

永禄三年五月六日辛未夏至節小入午火王  
卯木死を五行の運なり然るは義元己卯小生  
止信長ハ甲午小生ふ又遁甲式によるは夏至上  
元離午小乙奇を得坤未申小丁奇坎子小丙奇と  
得より十一日夏至中元震卯乙奇を得巽辰巳  
又丙奇中宮小丁奇を得たり十六日夏至下元小  
乾戌亥乙奇を得兌酉丙奇艮丑寅丁亥を得より  
上元乙奇離午小信長の本命と親しく申元  
震卯乙奇離午泊して火卯木を焚下元小乾戌亥乙  
旋り午火所生の土は歸を遁甲の運する必勝の



理と云へ

今川治部大輔義元朝臣あり年項上洛して京都將軍家を補佐し三好松永等が狼藉を鎮めんと思ひ立おろし領國乃仕置し暇なくこころは隣國の輩乃留守を時こころ堀目を押さるんと氣遣りこころ延引せしが北條こそ新し縁を結ひ親しくありほとむ伊豆相摸より東あを怖ろしきともなく武田の年ごろの縁者といひ左京大夫信虎父子駿府に逗留しあまは疑ふるにあらば越後の輝虎武田と戦ひし隙あくる武田の領國を隔て駿河と伺ふべきいそれなり今とて時節到来せりけりば

打たしものどもと云まゝに伊豆駿河遠江三河四國の軍兵を駈催し五月十日辰刻駿府を首途とす五月十一日夏至中元あり遁甲の乙奇震宮は泊る駿河より尾州に向ふを震より兌小あさるを以て震の乙奇を得て天時相應と定めしるもされども上元の離宮乙奇の循環を理を考え

けるふや  
駿府の留守も嫡子氏真その外一族同姓の侍五六百人は自國乃兵を籠らしたり然るも今度の先陣こそ大切なるを誰とて撰み充んと評定取るありけるふ  
參州岡崎の諸士志あり先陣を所望しけるふより



義元朝臣も止むを得ずその請はゆるをられし  
流布本岡崎諸士の意趣と解くや事實小違ひ  
時勢小叶くは因る盡くこれを削る  
斯く先陣ハ岡崎の諸將五百餘騎を打多へ今川家  
の侍次第く小列と立ち進發を十三日義元朝臣遠州  
濱名へ到着あり爰より諸勢を待てるへ都合四万六千  
餘騎とやされし尾州へ五万餘騎と我聞えける  
駿府より濱名まで行程廿四里余あり一日六里余り  
あはれ公式令小歩ハ五十里といひり令の五十里ハ七千  
五百丈と今この五里廿八町廿間に當る源平盛衰記  
治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百餘騎あり

鎌倉より稲村腰越ハ松原大磯小磯を打過て二日  
路を一日ハ酒匂の宿に著とあるを以て考ふは鎌  
倉より腰越ハ二里餘腰越より藤澤ハ一里餘藤澤よ  
り平塚ハ三里半平塚より大磯ハ廿七丁大磯より酒匂ハ  
三里余合をり十里餘是を二日路といハ一日路ハ五里  
餘小あはれ令の定と違ふとあり義元朝臣の行軍の  
日積も和田義盛のいふ処とや同ト又考は四万六千  
餘騎を二行ハくを馬と馬の間五間づと積り二万  
三千間あはれ十里廿三丁廿間とあるハ先陣後陣の  
間既ハ二日路といはる  
十四日濱名を立ち義元朝臣本坂より三州へ打合ハ



一手、東海道と白須賀二川吉田と押寄り、十五日義元朝臣岡崎の城に入り、手分と定らる。

濱名より岡崎へ十一里五町の行程と十四日十五日兩日小押たりたりめれ、五里餘づの定あり。

つゝ小尾州智多郡大高城を鶴殿長助が守る處あるが織田勢よかこまれ戦つち兵糧すて小盡んとは爰に於く急使をたせ、義元朝臣よりの事を告ぐるに、

義元朝臣 君、累代此郡乃領主小なり、海を諸

士より此邊の案内者あり、いふありて兵糧を大高の城へ入る給ふとありける、心安きとふは、こゝのすく若干れ小荷駄は兵糧負てせ、大高へ入るをいひ、

十七日義元朝臣岡崎と立ち尾張國智多郡桶狭間のあゝに陣と取、十八日智多郡所を放火し、明日ハ鷲津丸根の兩城攻落し、鳴海表へ討入んとその勢あつり、とく、い旗旗の峰も野も充滿し、時ふあゝる、關の聲ハ天地よむきて、影し、何様織田方の若く、一いもこゝえ、かゝりて見たり、

義元朝臣の本陣桶狭間の織田殿の居城清洲より、坤未申ふあゝる、桶狭間より清洲も、辰丑寅は當る、此時辰は丙奇あり、遁甲の生門天任を得、坤ハ遁甲の死門天芮に當る、あゝぎある、天時と云ふ、



前田孫四郎勘氣の事

并藤吉郎織田殿へ諫言の事

此時清洲より織田殿防禦の方便は油断なく敵の  
鹽合とてありてすし海にけるは今月十日より今川  
駿府城首途より由爰かこより注進ありけるに  
諸老臣より覺悟の上かぎり防戦おぼゆるとあり  
より織田殿へ籠城の計を勧むるものあれども織田殿さし  
取あひまゝに敵の旗れ手も見えざるにあらざり  
しき人のあるまゝいやと虚うそありておとけき諸士  
大將すらも心あざむきありありてあきらけく  
前田孫四郎織田殿の小性達より出頭せしめける

讒者の舌頭は災と招きこの比御前を遠ざけられ籠  
居り居りけるが今度今川上洛の由と聞織田殿より  
定めて防戦の用意ありて但今川の大敵なり織田殿の  
ころりよ五六千小過ぐる勢あり對の軍あるべし  
まゝに十死一生の合戦といふをさし我誤ありて御前  
とありざけらるゝか大事に出逢かぎり御旗本近く  
出る事だまぬとてはよいかも御免と  
蒙り此度合戦の御供して讒者の偽と訂してのちの  
誓懐を開くんとし思案し木下藤吉郎と一方ありぬ  
懇意あり彼と相談し御前の首尾をたずねたり  
ありあるゆきありとあり定めむそのより藤吉郎が



家を訪来り對面し心中とほまばれ物語り殿の御前  
ととりはくちり賜はれいとむすに頼し  
藤吉郎もゆひて孫四郎の忠あり誤るこそ成知り  
うらうへあまはさめくとや那はほまばれ織田殿聞入  
たまはるべ

流布本小前田孫四郎勘當の女色小因てその  
故織田殿の簾中の方によの侍女あり容色世  
小まづまはるし孫四郎これと戀慕し茶坊主祐甫  
といふものとなつて艶書を送りよその比山口九郎  
次郎も又この芳野を掛想しとも祐甫あまはるし書  
を通はるる女すては前田小あまはるし山口前田と

嫉しく祐甫を金と與て織田殿へ訴しめ終は孫四郎  
勘當さるし由とあるをり但孫四郎織田殿小仕へ十四  
歳まで初陣し十八歳のとき織田殿の童坊十阿弥孫四  
郎の笄と盗しと怒り打とて清洲と立のとき十九  
歳乃夏織田殿の舎弟武藏守信行と軍ありしとき  
よき首二り切り参らせ信行の郎等宮井勘兵衛尉  
よ面を射らとその矢もぬる宮井が首切り御前小参  
る織田殿ふり感とむし所領の地加えぬいとむしり  
然る時勘當らけし十八歳の時あり免し十九歳  
の時とある今年ハ孫四郎二十三歳なり  
とかくとる内今川勢とや参州迨押寄近日れら



智多の郡へ打入るべき支度のよし聞えけしと孫四郎大  
驚き早く御免と蒙り戦場の土とふる屍は耻とのと  
さどと思切く木下またのさけるより木下もせんさく  
又織田殿の御前小伺公へ今川とぞは參河路小著ては  
ある勢と五万と承りり峰山この遠なり天を焦し  
くおびく何さ御内の人乃恐る事も理小覺えは  
君もと弥御合戦あるべく思召はやと申けるより織田  
殿よにも不審げは御覽とてとめより合戦とすめ  
その方乃さめりれは成中こ我心得ぬ何う子細のある  
とあやと宣へどさんは我君合戦のおがめはらんよ  
一人よとも侍いほしものふ形りされば万卒は得

安く一將い得がごとと中そのはよあさ侍を勘當か  
給あといぶうはあかひ中あさゆと中をば織田殿さ様  
のさなたをも知るも知り今更いふ及ぶはそれよき  
侍勘當せしとる藤吉郎何と云ふとあささらふ  
くおと海をばよき隙ありと藤吉郎とささう聲を  
むそめこのやどちあさ願ひゆども御ゆるし  
前田孫四郎がごとあさゆ彼が中條以外の外といはゆく聞  
もすゆくゆく忍もながり斯迨御らび中てゆこそ  
意趣い今度あそ我君の御大事と覺えは大形なをも  
命ととて防ぎ戦あぬとて勿論かが我身と  
斯る身あ御前を駈け事いかり多くゆ敵の勢



と見るやいさや一番は切のりて討死とてくはが御勘  
當の身乃哀しとて屍の上も傍輩と一列の御覽  
ざらる海に存の事乃いさやとて泣くを見  
しより心ましくかくいや上ゆふと我と申せば織田  
殿さきつめよき侍とて誰とらと思召しつるにその  
ものさふう思召切らをもへバ勿く御赦免あるは  
ささ汝があしとてさるはよありと御不審とてか  
ばと以外の外は御氣色と損トあへば藤吉郎あへてさ  
もぬくその期よのぞとてさるはよとあんとあり  
はく又いさやとて御前をありとて前田とよなき様  
小拵せうがいまごさると御免の御けしきあり去

あがういさやとてさるはよとて御勘當より  
いさや油断なく軍の用意ありとてとるはよとて宿  
所よかへし時のいさやとてまらるはよとて今川鳴海のお  
と桶狭間乃らとてさるはよとて出張とて由告とてさるはよ  
鷺津丸根の城よりも急を告ると櫛の齒を引が如し  
流布本木下の前田とすむる辨とるはよとて本傳に  
けりよいさやとて削る

重修真書太閤記初編卷之二十八終

大問己の編卷二十八

二



重修真書太閤記初編卷之二十九

大高城兵糧運送の事

并織田殿諸士を集め酒宴乃事

今川治部大輔義元朝臣四万六千餘の軍勢を率い尾州鳴海に出張しその身桶狭間の西に陣を取諸將と分る敵乃要害を攻んとその支度あさうたり但大高の城小兵糧乏しと注進せしにより岡崎衆を土地の案内者あり相計り兵糧を入給りゆとありしにより五月十八日岡崎より御勢を出されあまこの兵糧を多くの牛馬小負せ真中引寄せ先陣五百餘騎



後陣三百餘騎にて打せむ

牛の車小積載とて運ぶは六百斤馬は二百斤と  
云と延喜木立式に見ゆ又雜式は運米は五斗を俵  
とて三俵と一駄と見ゆ二百斤今の三十六貫  
錢あり六百斤今の百の八貫錢なり卅六貫の米の  
今量めて九斗あるべし四斗五升入二俵とある百の八  
貫錢の米の今量二石七斗に當る四斗五升入六俵なり  
此時も大なり此法あるべし流布本小此時今川の人夫の  
百人として車一輛は人夫五人馬一疋は人夫二人と定め  
百輛百疋とあり馬百疋の負とて米九十石車百輛の  
載とて二百七十石合とて三百六十石是と四斗五升入

とて八百俵と及べり又せり大高兵糧入を用ひると云  
荷鞍あり其圖とてふる上古結鞍と云鞍と同ト又  
流布本小車二輛並べ段ふ引連禰と云の地乃理  
とてらぬ人の訛らあるべし此時本多平八郎忠勝  
真先にさると云も誤あり忠勝今年十三歳いふ  
御軍小從と云

かゝる人夫等小下知ありあつ様織田勢との邊は出張して  
待りけしれは定め襲い来りて兵糧を遮り止んとる  
る事なるとい何れと競ひあつとも牛馬小付ていけりも  
緩くは押行て敵を防ぐを武士の業なり兵糧とて  
の半馬の道を各との護は怠るまよとてさほゆるき御下







ども詳うあつて依くこれを削る

大將これを見よ酒井大久保あど聞えたる老將と呼  
近付あまて敵を喫止よその隙は兵糧を入終るそそ  
歸り来く後詰をんと下知しよい牛馬を追つけく  
過させぬ岡崎の諸將今い心安しと佐久間が兵を引  
け火花を散し戦わたり岡崎衆いづもそのれ  
たる老將といひ案内者あり佐久間の思切たる勇士あり  
双方牛角の軍あて勝負更に見さうけるその内は兵糧  
とをすくも過る大高の城近くやめて引續大高より  
鶴殿が手の者切て出で迎え奉りたるを佐久間たるふ  
見はる兵糧と遮り止んためは打出しものかそれと

安くと見過して徒小軍大高の兵し此兵糧入ふ勢と  
一手にあり若を付入せられる詮なしいざや人数を  
引上く又と戦ためと味方をさめ引くを岡崎衆も  
兵糧に事故あり入らん無益の軍し人数と討きく  
その甲斐あまらば敵はよらば味方競り及むし  
こそ是も隊伍と正して大高入大將と一手になり兵糧  
事故かく入納めくる由注進ありなれば義元大感敵乃  
若の前を過く難く兵糧を入る事心の剛も身の猛  
といひ凡人なぬ有さぬると心中にふく驚るれと  
大高城趾も尾州智多郡大高村の辰巳の方あり



東西五十九間南北十八間今志水家の宅地と形る  
 此城とてめ織田殿の築さるゝ処あるが山口左馬助の  
 織田殿は叛きし時この城を奪う今川家は降す小  
 山口滅びしちのち鶴殿長助これを守りしと云  
 鷲津の城小籠る處乃侍も今川勢の猛威を振り潮  
 の涌如く寄来る由を聞て此城俄小拵らるる構るれば  
 柵塀も堅固なるは矧や小勢も一日も持たずゆて  
 あわづ早く加勢と差越る左るは籠城の面々一  
 戦の下討死し御大事に及びふんと注進櫛乃齒を  
 引が如し  
 鷲津の砦大高村の丑寅の方八町計小あり東西十四

間南北十五間四方おさ上の砦なり爰小五百廿騎  
 あり籠ると云ふと不審なりとてめい今より廣う  
 一もや此砦の下小鷲頭山長壽寺あり  
 清洲あり鷲津の注進あり形る小驚き地下人等ハ  
 只今事の出来し様う狼狽し資財を運び妻子と立隠  
 るせとてける小より城下の老若男女斯何と云ふ世間  
 ぞやと恐る怖き氣も魂も身小添は雑説様たるはとて  
 織田殿此もはるぎも平常よりも穩やう小取静めて  
 たりける処へ木下藤吉郎參上し今川大勢もて既  
 當國智多の郡へ亂入し鳴海表を放火し鷲津丸根の  
 兩城へ軍兵と差向んとあしゆ由



丸根砦ハ大高村より四町ほど北の方少なり鷺津の  
 砦より東西五間ほど廣く南北同く十五間計  
 ごとく丹下ニヶ處の砦へ御勢を籠らむ然るべくゆと  
 中々れい織田殿仰らる様何れも兩城より注進をさる  
 小敵の勢ハ雲霞の如くと云也  
 丹下の砦ハ鳴海驛乃北鳴海神社の右ふわり  
 我自彼處小馳行これと救ふんと思へ徒小軍兵を分る  
 所くの要害ニ籠るふ及ぶまじきなり知や丹下ハ遙々  
 味方の地小近く多くもあはぬ勢どもと用ふるは砦にあむ  
 るとも其詮かゝると宣へば藤吉郎丹下ハ味方小近く  
 敵る遠き地あはゆへとも丹下ニヶ處の要害を我君の

御運と開きあはるん大切の砦あはゆへ因て此要害を籠ら  
 るん者こそ我覺えあはる侍まてい有べけれ抑味方ハ七ヶ處  
 の砦あれども四ヶ處ハ敵のこめよ打落さるべし但敵地  
 近き砦あはる今川勢も競はる戦ハ味方も大形討死すし  
 然ハ義元勇武世ハ勝とたれども智慮淺くし且驕  
 慢の人乃癡あはる諸勢を勵まし敵を輕んじ備疎ハ攻  
 近き形ハ其勢勝小乗とたハ總軍大く丹下ニヶ處の砦  
 に向き戦と挑むべし然らんを旗本以の外ハ無勢あ  
 るべし其時我君旗を卷銜の七寸と結志のいやうに中島の  
 小路より義元の本陣田樂窪へ無二無三ハ切入む敵乃  
 勝るといふ心急り帶むる解く油断したるん處へ



押掛く手痛く戦く大將と討取んと手の内ありと  
私語々らにより織田殿深く喜むを藤吉郎が手と  
取て孫呉が秘計子房の籌策も是るを及ぶと秘と  
と宣ひつ去るが驚津丸根中島善祥寺等の岩の兵士  
小氣と付了とを使者と仕立明日卯刻を大將自出  
陣あるべし心猛くよく成る由と下知されたり  
中島若とるを鳴海驛中扇川の上あり梶川五左  
衛門尉あつと成りて戦死を今民家の後梶川塚と  
く現存は善照寺の此の鳴海驛中島町瑞泉寺の  
北より今古松六七株當時のまに存在せり爰と成  
りし佐久間左京亮なり

丹下二ヶ所の若乃大將は今宵のうらま御定めありて明曉  
早天より打立君も續いて御出馬しつるべしと藤吉郎  
勧め奉るふより織田殿の必勝の時至るとおがめ定  
められつるは只今宵の迷雲をわき隔夜は光明を求め  
得し御氣色勿く清く見えあふにより諸老臣をらる  
定め籠城まじくしての御合戦あるべしと片唾をのんく  
參集せり然る小織田殿の生絹の帷子只一重を著し事も  
あげある躰をて廣間小出の酒宴をこそ催されを老臣  
をらひあはれ最期の酒りあふんと思切く御盃を賜り  
けること何れも今宵の快より一獻を傾けゆへと例は異り  
くもて那しあふより何様存亡とも小明日一日も逼る



たまひ御暇乞の土器うと咽ふむをふと堪えゆく次第に  
順もく既も數獻ふ及でも軍の評定更なる彌氣色  
よろいげ小見え給ひやう宮福大夫と召され鼓を打せ  
られ織田殿自立上り扇を開く人間たる五十年外典  
の内とくふ夢まわりの如く一度生をうけ滅  
せぬものあまきさうとく返り舞歌いそのま奥へ  
入らんとかふふより柴田勝家よりへるの聲をうけ  
大敵もて小近くと押寄塚目の要害と攻んとする由を聞  
召かぞ救せぬふべき加勢も出されど又合戦乃評定  
も形一玉とば如何なる御計略より勝家等が如き愚  
なるもの意は落付いふと中やきく織田殿莞爾と

打笑むい敵塚目ぢう攻来り由注進をこり形を  
明日の出陣して兼く思定め一戦は勝敗を決せんあれは  
別の評定は及ぶなげ但丹下ニヶ所の岩小いも大將あり爰  
い大事の要害あり勝家罷向く守るべ坂井右近名古屋  
弥五郎以下共く力と合とべ一同く南の岩を佐久間信盛  
池田勝三郎丹羽五郎左衛門尉森三左衛門尉以下守り  
かまへくきこむむる随分骨折防ぐべ夜既よあけ  
らんとや打立よ屋ぐく御出馬あるべと宣いとて寝  
所小入る勝家信盛此御説を聞きよにも嬉よげふ打笑ひ  
實は殿の歌をせらひく一度生を受くもの滅せぬものや  
有べき我も人も今宵あざりの對面を命あるうちよく戦へや

大月己刀編卷二十一



人々互に勇氣をくげし合おのりて退出して出陣の支度なり

藤吉郎前田小義とすむる事

并今川義元朝臣軍勢手分の事

前田孫四郎の木下藤吉郎小就の勘當と佗々とも織田殿ゆき玉と藤吉郎前田の心根をおりいやりし御免あさ由と有のまに語りあひ若きもの血氣にまうせとやゆりく自害せんもとらうとばとおひりくを聽く御免あさふれどもおれこそと御事多くて延引せりと宥めとて置るふとや十八日の夕ぐれにおひ明日の織田殿出陣すし有無の一戦は事決りかば藤吉郎いふも

し前田は拔群の手柄とあつて功を御免と申あさんとおひしに木下前田を呼近づけ扱も御邊の御勘當申宥めんと存ト種々様々道理と付く御佗中てゆども殿何とも宣は押返し押返し操言成中とて結句某までも御氣色と蒙りゆ元來御邊と懇志之並くかぬ親もゆい幾重あも中協へんと心を碎きてゆ其甲斐あること近頃面目を失くゆ去ども中協へんものと頼母人を見成とくる某が不祥御邊が不祥二の不祥を一ゆあ御邊も某も身と山林と遁と陶淵明が歸去來の跡をも逐まりゆれども我等愁ふ弓矢取身なり主君乃大難目前にありそをを見捨て退きたらんとい誰の善と申べき所詮明日の殿も



御出陣ありて織田今川十死一生の合戦あるべしと只今  
定めありと聞き去り我君も能思召切くると知らる  
たり冥途黄泉の途も貴賤の差別なきや然れ某も  
御邊も同路に打死し我君万が一にも討せよと我と  
二人御前の逢が露を拂らひ奉るべし若又我等討死して  
殿の御運目出度まゝは忠義のこゝろ命を棄て者乃  
屍なり御勘當も何れ免ざらん虎豹の死し皮を止む  
武士の命より名を惜むれ今日ありて明日は無身なり思  
へば如夢幻泡も我等が今此身の上ぞ御勘當の免る不  
免も命長くと思ふが上の迷あり左の思ふや前田殿と搔  
口説く孫四郎夫程まで御邊の執成爲給ひても聞入

あはれぬ我身の過とよく殿の悪しと思召すと故まを逆も  
思切く某が命なれ但一人ありても多く敵の首を取  
閻摩の廳に持参あり娑婆の土産と名乗らば修羅闘  
争乃苦患と免も君が百年の後乃再會と待奉り主従  
三世の契と果さめと思へ今追の迷雲の跡なく醒あが我  
等の斯る身之孰人の備と借の貸さや如何して軍の場へ  
出づるやと云ふ藤吉郎夫こそ兼て丸根の若乃佐久間大  
學小契約置たり早く彼處へ赴き働さあふべし抑驚津  
丸根の兩岩の敵の掛り口あれば恰も勢破竹の如くさるべし  
其處を懐く勇氣と振ひあふやとて淺野孫兵衛尉と書  
翰とりて前田と共に出立せり佐久間元より前田と親

大目三刀編卷二十一

十



しき中なり殊に浅野が伴ひ来りし上あまの異儀なく  
砦の中へ請入て入り然も今川方あり大將義元朝臣  
十八日の夜諸士と集め城攻の手配と定むるが驚頭へ  
富永伯耆守氏繁

富永伯耆守氏繁は遠江國茶原郡相良の地頭なり  
一万三千石と領と云

朝比奈小三郎泰秀次大將とて一万餘騎三浦左馬助義次  
と二陣の大將とて五千餘騎と差向らむ九根の此石を兼  
約あり岡崎の御勢五百餘騎と先陣とて駿河衆の庵  
原右近大夫忠春飯尾豊前守武茂一萬餘騎と副たり是を  
岡崎一手の軍功ありんを成嫉とてなり次は葛山備中守勝

吉五千餘騎少々期は臨り打立後陣小續けり義元の旗本

江間左京亮成親由井美作守友政關口越中守高重  
富塚修理進勝氏温井藏人宗次朝比奈藤九郎昌時石川  
新左衛門春時以下一万六千餘騎左右に列してこれを守護し

江間左京亮成親は四千石由井美作守友政は駿河田中城  
三万八千石關口越中守高重は駿河花澤城二万六千石  
富塚修理進勝氏三千五百石と云

遠州二股の松井五郎八宗行手勢二百餘騎と以て本陣の  
左翼と張り同國掛川の朝比奈備中守濱名とも五百餘騎  
あり右翼と張り駿河勢は如是大勢あり新守と入替  
りれ替尾州方の要害片端より攻潰し明日は早く清洲まで



亂入織田と只一時攻め攻落さんと擬たりたり夏の夜  
の曉やとくくや東雲らく成行へ今川勢三万餘騎寅の  
始は兵糧を飼卯刻は出馬し鷺頭丸根へ押寄るや否鉄  
炮と打掛黒烟の下よりと鐘と入息とも續せ只一攻り  
攻落せよと吠く聲もて押出を斯大軍を引受く物の屑共  
思なれる尾州侍の大膽さよ俄小拵え一砦ある上たとい  
鬼神なりとと五百餘人あり一砦手も足もど其勢大  
磐石とりく離卵と壓は異るべきとぞ見えたりたり

重修真書太閤記初編卷之二十九終

重修真書太閤記初編卷之三十

鷺頭丸根兩城合戦の事

并佐久間大學助討死乃事

永祿三年五月十八日卯刻より今川勢三万餘騎織田家  
の要害鷺頭丸根の兩砦へ押寄十重廿重は押取卷一搦  
小搦落さんと攻立たり

五月卯時己の方孤より亥の方虚なり田樂窪より  
鷺頭丸根の酉小當る酉の五月未の時乃孤あり

就中丸根の砦へ向ひ岡崎の諸將酒井大久保植村石  
川なり大將御年若く在せども朱具足と召せらる



真先よ進ませ給へ誰の後は奉るべし何も無雙の勇  
士なり射とぞも突とも物の員とせは短兵急攻立ふ  
駿河乃副將庵原右近大夫飯尾豊前守一万余騎岡崎  
衆は劣るを續げと下知しほくつうの砦三方より搦立  
りみ立攻寄り若の大將佐久間大學兼て期したる  
こかぐ目小餘大軍と蠢蠢ととおりねい氣をも  
臆らめさば其勢一騎當千と云をれども僅く五百  
餘人心と一けりり持口と固め鉄炮と放ち石弩と發  
し火水もあり防戦攻も海道は聞え岡崎  
勢防ぐ尾州小名高き佐久間形り双方必死の軍ふ  
勿く急ふ落べとも見えは寄手若干討とるべ今川

勢少く猶豫し見え見と處と見とゆして佐久間大學  
士卒といさめ寄手は既浮足あるを友と防げや兵士  
ごもと秘術と盡して下知しり又鷲頭の砦今川  
勢富永伯耆守朝比奈小三郎一万餘騎三浦左馬助義次  
五千餘騎少く押寄むりくと取巻竹束とつけ鉄炮を打  
のけ無二無三は攻めりほ小砦の大將織田玄蕃允飯  
尾近江守士卒と下知し防とり寄手雲霞の如く  
稻麻竹葦の亂し小似く少も透間る兵士とつう五百  
餘人争でり此大敵と相撲とやと膽と冷して恐怖と落  
支度より外よ心も形く狼狽極まきほり寄手いふく  
機小乗く息とを繼ぎ攻立しや城中以の外小騒動

大岡己刀編卷三十一



一塀と踰垣と傳ふ落行者も多かりたり丸根の佐久間  
大學矢倉より此躰を見て鷺津の味方危あげなり  
前田殿急ぎ馳向く力と合せあへや寄手の作る関の聲  
の猛く聞あふ必定玄蕃允い討とつかん鷺津  
落城を此城の寄手ゆめ嵩むべしせめ今二時計  
候かしのうち清洲より出馬ある處さ形り  
左あふ敵と切崩し味方の運を開く時ゆるべし心  
得もや前田殿と勸むとば孫四郎強らん敵と見え  
進むと勇士の本意るれ矧や御邊の御差圖のうへ  
望む處よゆるりといふまゝ鎗追取馬乃手綱と繰りけ  
くゆるりと打乗佐久間あをを見天晴勇士や御邊

わりの侍がせめく兩三人鷺頭よあるあふあおの如き拙  
と軍いある海に厄弱の輩此臆病神よさ我らと  
體のうてさよ左ら急さあ若を出し参らせんと  
服部玄蕃渡邊大藏と共に前田と中に引はる城戸を  
開く佐久間真先小進と蟻の如く聚りたる寄手此中へ  
突める寄手いささ攻あぐん仕寄を引さけすく  
ためらひ居る處あは烈風のどと佐久間服部が勢小  
氣とのちれおもは左右へ颯と引こる前田續けり  
く今川勢路を閉り通けり前田難れ突ぬけ  
く鷺津の城へを著て見はと織田飯尾防く  
を術よはさ城を落中島の砦と志し遁を行を退せ



と今川勢跡を慕ふ追討一又一手に既城小入持か  
しめし處をば前田頼氣をいしち今少一早く  
せばかたより拙く城を渡さるるものど齒嚙  
をふし怒りけりせめて當の敵より一人ありとも討取  
る尾州侍の刃金と見せしやと獅子奮迅乃勢を形し  
敵の横合より突かり勇を振ゆる馳立る今川勢は勝  
よのいさ備と亂し追撃競ふ思も寄ぬるもの騒ぎ  
立右往左往散亂に玄蕃九と誰とあねど味方人  
踏止り戦ふとありい郎等四五十人計し引返り力  
を合せし戦ふと前田弥勢を得たり今川勢れより  
より富永伯耆守が組下松山新吾といふもの前田一人

突立られ駿河勢とて小敗走せんとするもの口惜し十  
分勝し軍をかくたり切崩さるるたし彼を討  
る敗軍の諸士の目と覺させんと只一騎鎗を取る前田よ  
向ふ前田元より今日限と雑兵のを討んより責る  
侍一人討むやとありし所をば御参あはれい鎗とを  
斯ふと遣ふものど請て冥途の土産よせよと寄合せし  
手と碎き戦へば勝負牛角より何なるも見え  
けり前田より廿三歳血氣さるる若武者あり松山の  
今朝より數度の合戦は腕萎る氣疲を漸下鎗となり  
たる所を前田得たりと付入る突たれは松山鎗を棄太



刀を抜んとせし処と前田弥踏込松山が太股をたたく  
ぬ突深手ふれは少しもたすべ馬より真倒止と  
落をひるとそのまゝ前田飛下押へ首を搔落し  
首をひ取付に結付馬を打のり追来る敵を待つとやも  
今川勢鷲津を責抜しと鹽とく暫く人馬の息を繼  
せんと引返しこれに織田飯尾もめくくして中島まぐり引  
退り前田の松山が首を札をつけ前田某闇王へ土産とさる  
し下人持を大將の實檢小備へ給ゆへと木下が許頼  
遣て我身の丸根乃城へ引返と然る丸根の城をば  
岡崎の諸将手痛く責りけるは佐久間大學三百  
餘騎を真圓に備えり突て出づ今を限りと戦ふり

岡崎の諸将の軍を馴し剛の者あれば死狂ひたる敵をば  
新手ふつとてや若くは込入やと大學が後を絶切て責  
めい庵原飯尾の佐久間と中に取込く暇もあはせぬ様  
とりけりそのまゝに岡崎の大久保七郎右衛門忠世同治  
右衛門忠佐堀を踏り乗入る  
流布本本多平八郎忠勝片手ひき城中より突出し  
鎗を引奪ひ忽ち堀に上ると記すとくも前よりい  
如く平八郎の十三歳御軍は後よりよく是を  
とらぬ  
岡崎衆續て三百餘一同み乗入る面もろく切く廻るほど  
は若く残り二百餘人一足も引む戦ふあつた組或



差違へくれ敵も味方も若干くれ大久保兄弟も手と  
負つとも若をい終は乗取たり

大久保七郎右衛門尉忠世といひ甚四郎忠員少嫡  
子といひ永禄三年ハ廿九歳あり治右衛門尉忠佐ハ今  
年廿四歳去弘治元年蟹江城攻のころ阿部四郎  
五郎杉浦八郎五郎父子忠世の伯父大久保新八郎忠  
俊父の忠員弟の忠佐と共に先登し鎗と合も忠佐  
時ハ十九歳敵ハ柴田權六なり是を蟹江の七本鐘  
といふ

佐久間を今川勢を切拂ひ若を歸入らんと揉よりんご  
戦へとも敵ハ大勢あり大濤小浪の寄歸る如く新手と

入替々責立られ前後左右只一處は打合せて撃ども  
突ども破るべきをきまらむけむ三百餘騎今を最期  
と駿河勢一万餘が其中へ面も振を切て入當る成幸小  
難立しむは敵ともあやむ討取はむとも味方も多く  
討をとり佐久間服部心を猛くころやれども其身金鉄  
のよとあはれ太刀疵矢疵あやむ手負く亂軍の中小  
討死を前田孫四郎鷲津の戦場より取て返し佐久間  
と一手にあり軍せんと鞭と鎧と合せ馳来る岡崎乃  
御旗高く岩の上は翻り佐久間討死したるといへ残兵  
處は小追撃を敵ハ氣色よげ小岩の上を勇めるをこそ  
爰小切入討死せしとて證人無む其詮なり我君の御大



事今より後そ肝要なりとおろし直一再度馬を鞭と  
うち中島は引退く

岡崎乃御軍勢大高へ入城の事

并信長出馬熱田宮奇瑞乃事

今川治部大輔義元朝臣桶狭間にありて田樂窪に陣  
と取先手の戦い如何あつんと相圖を待てる処へ鷲津  
丸根の合戦味方打勝朝がけに乗取丸根の大將佐久間  
大學助と打取し由と注進し首ども多く取りし實檢  
ふ入るかば義元朝臣莞爾と打笑ひ左に我あるべしと  
たふすと悦喜極りし一樽を開く使者と擣らひ諸士  
の勲功を以て感賞し中少を岡崎の御旗を丸根

の砦と一番に乗取あいに比類なき高名と申す  
昨日の兵糧を運送して味方の銳氣とすめ今日先  
駈ありあつて強敵と切靡けあつて前代未聞の御働  
御勢も定めし疲はらん疲勞や軍兵と休息も  
させばしと戦ひむるこゝ良將の形もあつて  
大高の城に入らざる御勢と休められ御軍勢をも  
厭はせあへしと申すに承りぬとて御勢引  
つげ大高小入らざる今川の軍兵と入替らせり御内  
の諸將との意を得む何故は目乃前の敵に向てを  
し敵乃間遠き大高へ入らざるやと具驚き且ら  
いうり抑今度の先陣は岡崎衆の申す請ひ処まで深き思



慮のゆりしは敵小向をせむとて先陣の甲斐も  
 形く何ある方便を以て拔羣の功を立すべし義元  
 乃此城に入らせりて休息あれと定めしことを不審るれ  
 只今別の御使を以て軍の先陣かけさせりし由仰  
 遣され然るべしと勧め奉りける大將莞爾と打笑せ  
 給い思召む心のあはれ海をばたき此にありべき形り  
 と仰られし城門閉させりて守らせりしなり  
 流布本は義元朝臣の先陣ふ加りて軍しとも今  
 川勢敗北をば先陣乃士卒盡く討死とてさなり今  
 軍の様と考ふる今川四万六千の大軍をちとて恐  
 る色あり十分一の勢をて防戦する織田家の軍略

わらじりついでいある奇計をやなすりたる  
 おとろしき処へたやすく向ふて近比鹿忽といひ  
 命しされども先陣は進しその敵をくそのる  
 づたにあはれ然る今川の意より先陣を退せり  
 處は入る休息せしと定めしと却て天運たのほる  
 似たりとて諸老臣の諫をいさせりしとて  
 然るもたしめりて證據をねがひしに低書と  
 清洲の柴田佐久間森池田坂井以下の侍大將二千餘  
 騎あり出陣し舟下兩處の砦へ進發しつゝも今日と  
 限りの軍とありし思切て我出立たり織田殿の例より静  
 は起出多ひくる處へ鷲頭九根の軍乃注進来りはまとも



おどろきあふ色もあつきのゆる朝の粥をどすめく  
のち御旗馬印と出されまては鎧とめはる處へ木下  
藤吉郎參上し存ずる旨のゆへに御先へ罷越し熱田の官  
あゝ待奉まてしちやてなぐる馬は打のり馳せり織田  
殿さうら打立との共と仰らるるに近習馬廻の螺貝聲  
高くよに勇ましく吹立り然る宵の程よりあまりに  
緩ふとめてあつるふより諸軍勢心ゆるびし打解過  
しと見え相圖の貝乃音とてお終まてと出来る輩五  
七人よ過びされども織田殿のまては見ぬよりて馬と  
くやめあひ熱田大明神の旗屋口まで三里の道を一駟  
よ息をも繼と馳あふゆる追く走付く三千餘騎にあり

小多木下藤吉郎のこゝ爰お待奉り合戦勝利せしめ  
祈禱の願書と社頭よ籠らと然るべしとや上り右筆  
武井夕庵と召く書せらる

敬白祈願事

夫以當社大明神者累代聖王曩祖朝廷鎮護靈神  
也為守家國之永久殊為定夷狄之凶逆垂跡於東  
海之邊域略信長苟為平相國綿瓜蒺受生於弓  
馬之家僅繼箕裘之業以來遠悔先祖之無道近憂  
叔世之極亂再欲興帝都衰微治國家之擾亂致君  
於堯舜救民於塗炭之外素懷非他矣略于茲源義  
元起駿豆之間振威遠三兩國犯近里遠境破却神



社燒散民屋任我意而不敬 叡慮不用武命妖孽  
月盛也日茂也葛藟相連無奈之何者也兩葉不  
却用芥柯今既如此而猶至於強大乎彼多勢及四  
萬有餘此無勢僅三千不足矣以寡對衆恰似螻蛄  
當車轍同蚊子咬鏃牛敢非賴當社神力爭得勝之  
乎傳聞 日本武尊之古亡東夷於蒲原也嘉兆如  
谷符契速誅戮凶徒於目擊之間必矣仰冀水火之  
兩石隨宜施靈驗八劍之銳刃斬衆賊之首立滿所  
願伏捧一矢鏑以準西林之禰祭蘋蘩之奠者也今  
此舉義兵全非私用私欲而為起王道之衰救民間  
之危也玄鑑莫誤仍願書如件

永祿三年五月十九日

平信長謹白

清書の上神殿に奉納ありて暫く拍手祈念ありたりよ  
不思議なるあり本社のうらふ響の音たう聞え東  
向あり馳あふ如藤吉郎大は勇まきり當社  
日本武の尊ふり東夷征伐の勲功まは海と大神  
あるよ只今響の音乃東とけり馳あふを即東夷の  
今川勢を罰しむんそ神幸ありに疑ひる神力  
既よ加らぬる上敵何万騎なりと恐るに  
今川勢乃放り弓鉄炮いあつてその軍兵にあつた刀  
刀いたちあちよ主將の身と害ふべしあつて神は偽  
形とものあつて有るき神徳あつて掲焉神威と



再拜あして我よりこびり織田殿も感涙を押し  
 神拜ありける奇瑞とまのあつる見はる軍兵ども忽  
 隨喜の色をとり勇氣凛々と猛びつとや軍場へ  
 とせ著る鎗と合を敵を撃んととやりけるより  
 織田殿さつへ我は續けや人と宣ひかゝる馬を早め  
 るみ所は白鷺二羽とたきして社頭より飛出旗乃  
 先にさち東とほり翔りゆく藤吉急度見送り  
 當社の明神白鳥と取りあひし正しく縁起あ  
 りしなり然れぬの白鷺は明神のせまひんあつる  
 ける瑞相ありやと塊と脱る再拜をいふ事を見し諸軍  
 勢まもく末頼りくありひついとすみり

此時柳色の帷をとり衣る侍一人鎮皇門の側は畏  
 る鎮皇門とい熱田宮の西門あり織田殿見あひ何者  
 ぞと問をせまひたれ其れ落合村の者みては所願あり  
 く日参いしは今日御合戦あるべし由承り及び参  
 上仕ゆとや合戦の如何と問をせまひ御勝利必定と  
 やその顔色尋常ありと見え近く召寄素性を尋  
 らるふ其れ甲斐の武田乃侍は原加賀守とやりの  
 末子幼年の比駿河北大乘寺の弟子とるり男色の  
 こゝにあり今川家乃近習七人と争論し五人を討て  
 立のさ知多郡落合村に來り住し名を桑原甚内  
 とやと答ふとら義元とめ今川家人とば見たり



ほろん我軍勢よ加へり働くべしやと問ひあふは畏り  
 りと中により織田殿著料の具足及び來國光乃刀  
 と賜ふ甚内織田殿の馬は近より密談しむそよ大  
 高村へいり今川乃家士と昔語りふ時とろし田樂  
 窪の本陣乃様と穴規い歸り風雨の油斷と見せし  
 帷幕の内へ忍び入義元朝臣と組く是は差殺し  
 かどと今川近習の者落合て甚内と討留るるとる

重修眞書太閤記初編卷之三十終

三都書林

三條通升屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 博勞町	河内屋茂兵衛
同 筋木町角	河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同	小田屋新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
水石町十軒店	英子屋大助
大傳馬町二丁目	丁子屋平兵衛
横山町三丁目	和泉屋金右衛門
浅草茅町二丁目	須原屋伊八
筋違御門外旅籠町丁目	紙屋徳八



